

## はしがき

本書は、資源論の本である。

資源を対象として、技術論、産業論、国際関係論、管理論を展開している。2020年現在、地球社会として取り組むべき行動計画「持続可能な開発目標(SDGs)」や「天然資源の持続可能な管理」の考え方と足並みをそろえつつ、日本独自の歴史と現状をしっかりと見詰め直して、理学、工学、人文社会科学また学際的視点から、資源開発をめぐる課題と国家戦略の行方を多角的に描き出していくことが目的である。

同時に本書は、地域研究の本でもある。

1973年の第1次オイルショックからまもなく半世紀になる。この半世紀に及ぶ日本・中東関係構築の主軸は、「産業発展のための原料としてのエネルギー資源の確保」という課題であった。一方、近年、資源確保を軸とした日本・中東関係は新たな局面に移行しており、レアメタルを含む金属鉱床の共同調査、太陽光発電や原子力発電の共同事業といった石油・天然ガスの代替えとなるエネルギー分野に加え、地球環境問題や社会問題などのグローバルイシューにも積極的また多面的に関与するようにもなってきた。

現代社会は、一言でいえば、経済重視の道を歩むのか、それとも環境重視の道を選ぶのか、これまでも増して、その選択を迫られている。ただし必ずしも二者択一ということではなく、どちらも重視した、というより、どちらにも配慮した現実的な道を模索している、と形容するのが実際かもしれない。どちらにしろ、化石燃料の開発が主要産業であってきた中東諸国は、いま間違いなく大きな産業構造の転換を迫られている。

戦後日本においてどの年代でも、中東の政治、経済、国際関係、エネルギー事情の最新情勢を平易に解説する邦書や政府機関やシンクタンクによる報告書は多数出版されてきた。対して、資源という用語の概念を規定し、中東の自然環境と天然資源に関する基礎的かつ網羅的な知識を身につけた上で、地下資源・鉱物資源の開発を軸として、政治経済から環境問題に及ぶ現代的課題を多

角的に論じた類書は皆無に等しいといつてよいであろう。その一因は、エネルギー産業と理学、工学、社会科学のように産業界と学術界が密に協力してきた側面がある半面、学術界全体においては、各分野での堅実な進歩とは裏腹に、自然科学と人文社会科学との間には必ずしも緊密な研究交流がなかったからである。特に資源を対象とした、いわゆる文理融合的な学際的研究は他地域の地域研究（例えば東アジア、東南アジア、アフリカの諸地域）に比べてあまり深化してこなかったと言える。

そこで本書では、日本において「資源」という言葉が用いられるようになってからちょうど100年がたった2020年、同時に「オイルショック」への対応としての「資源外交」が開始されてから50年近くがたった2020年現在における、現代中東の資源、経済、環境の関係性とそれらを横断する課題を文理融合による視点から浮き彫りにしていきたい。それは言い換えれば、自然環境と天然資源に焦点をあてて、資源開発とガバナンス、経済成長と環境影響、地域生態系と資源管理などの問題群に取り組むための一つの見取り図を示すことである。また、環境重視の立場に立って、中東地域の視点からグローバルイシューを再定位する試みでもあり、また、これからの日本・中東関係の新たな軸を、学際的研究に根ざして提起する試みでもある。

本書は、「中東の天然資源と自然環境」、「エネルギー資源と日本・中東関係」、「新たな資源探査と技術開発」、「変わってきた産油国の国家戦略」、「これからの資源管理の課題」の5部9章からなる。

第I部「中東の天然資源と自然環境」では、まず「資源」そして「中東」という用語を定義することにより、本書の視角と論点を明確にする。また、中東の自然環境、生活様式、産業構造について基礎的かつ網羅的な知見を深める。

第II部「エネルギー資源と日本・中東関係」では、日本と中東地域・イスラーム世界との交流の歴史の変遷を丹念に追い、エネルギー資源開発における協力関係を中心として、日本による中東和平構築への努力や多重的な協力関係の試みの足跡を辿っていく。

第III部「新たな資源探査と技術開発」では、アラビア半島の石油地質を概観した上で、アラブ首長国連邦を事例に、油ガス田開発そして地球温暖化ガス削減技術開発の最新動向を紹介する。次に、これまであまり探査・開発が行われ

てこなかった鉱物資源に光をあてて、地質構造発達史にそって様々な鉱物資源の特徴とそのポテンシャルを紐解いていく。

第Ⅳ部「変わってきた産油国の国家戦略」では、湾岸産油国の資源経済の成り立ちと政策課題を理解した上で、石油依存型経済からの脱却を図る国家ビジョンの具体的な内容と最新動向を追っていく。同時に、国連環境計画の報告に基づき、現代中東が取り組んでいる環境問題の優先分野と政策オプションについて具体例を交えて検討していく。

最後の第Ⅴ部「これからの資源管理の課題」では、地球社会として取り組むべきSDGsと「天然資源の持続可能な管理」の考え方を踏まえて、学際的視点から、現代中東の資源、経済、環境をめぐる将来像を多面的に描き出していきたい。

いま私たちは、新型コロナウイルス感染症とたたかい続けている。グローバル経済を牽引してきた駆動力、すなわち人々の国際的な移動やエネルギーの大量消費は突然、途絶えた。すると、ぼうぜんと立ちつくす私たちの眼前に、自然の脅威、産業や生活のもろさ、国家の個性、そして社会が抱えこんできた本質的な課題が浮かび上がってきた。資源は必要を満たすためのものである。しかしややもすると、とどまることをしらない人間の欲望が世界システムを翻弄しつづけてきた。これまでの日常を取り戻すというより、新たな日常をつくりあげるために、資源に対する科学的思索を読者諸氏と共有できれば幸いである。

なお本書の内容が文系・理系の多分野にわたっていることを鑑みて、理解を助けるための用語解説集（キーワード・リスト）を各章の執筆者と編者で作成した。本文において太字で明示したのがキーワードであるが、用語解説は法律文化社のウェブサイト内の「教科書関連情報」([https://www.hou-bun.com/01main/01\\_04.html](https://www.hou-bun.com/01main/01_04.html))において自由にアクセスが可能なPDFファイルとして掲載したため、ぜひ活用されたい。

2020年12月

縄田 浩志

は  
し  
が  
き